

八王子消化器病院ニュース

第50号

医療法人財団 中山会

八王子消化器病院

消化器病専門医療機関・東京女子医大関連病院

日本医療機能評価機構認定病院

〒192-0903 東京都八王子市万町 177-3

TEL : 042-626-5111

www.八王子消化器病院.com

制作 (株) 教育広報社

おおり

HACHIOJI DIGESTIVE DISEASE HOSPITAL NEWS



リーツェンの桜

八王子消化器病院 病院長 原田 信比古

今年もまた桜の季節が終わり、木々の緑が芽吹き爽やかな季節を迎えました。病院もこの春、数名の職員がその任務を終えて職場を離れ、一方、新しく希望に満ちた職員が入職して新年度が始まりました。いま、病院のコーラス部では「リフレイン」という曲を練習しています。その歌詞は「ぐりかえし咲くつぼみ、ぐりかえし実る枝、ぐりかえし積もる雪、ぐりかえし溶ける雪、来る年も来る年も、その度に初めまして、その度に懐かしい、・・・何度でもぐりかえす、この時はたつた今、この今は一度だけ。」というものです。私たちの目には毎年、毎年同じことの繰り返しのように見える季節の移り変わりにも、二度と帰り来ない、今年にしかない何かがあると、散りゆく桜を見ながら思いました。

皆さんは「肥沼信次」(こえぬまのぶつぐ)という名前をご存知でしょうか。第二次世界大戦直後のポーランドに近いドイツのリーツェン (Wrietzen) という小さな町で、極めて過酷な状況のなか、多くのドイツ人の命を救った八王子出身の医師の名です。彼は1908年、八王子中町の肥沼医院の長男として生まれ、八王子第三尋常小学校(現八王子市立第三小学校)から東京府立第二中学校(現都立立川高校)を経て、日本医科大学を卒業、東京帝国大学で放射

線医学を学び、1937年29歳の時、ドイツ・ベルリン大学(現フンボルト大学)へ渡りました。大学では優秀な研究者としてフンボルト奨学金を得て、東洋人としては初めて教授の称号を与えられました。しかし当時、ナチスドイツの戦局は次第に悪化し、1945年3月にはベルリン在住の日本人445名にドイツからの脱出命令が出されていた。しかし、集合場所となっていたザルツブルグに彼は現れず、その後の消息は途絶えたままになっていました。その頃、ソ連軍に追われた400万人ともいわれるドイツ人がポーランドから逃れて来ていました。その経由地であったリーツェンの町は敗戦後の壊滅的な状況で、上下水道も、医療施設も破壊されていたところへ大量の難民が押し寄せて来たためチフスなどの伝染病が蔓延していました。ドイツ人の医師は皆、戦争に駆り出されていなくなり、この町の伝染病医療センターの医師は肥沼医師ただ一人、看護師は7名いたそうですが、うち5人は伝染病で亡くなり、惨憺たる状況だったようです。そのような中、彼は患者の食料や医薬品を集めるために奔走し、床に横たわるおびただしい数の患者一人ひとりに献身的な治療を行ったと伝えられています。しかし、遂に彼自らも治療をしていたチフスに倒れ、1946年3月、リーツェ

ンの町で37年の生涯を閉じました。悲惨な状況の中で多くのドイツ人の命を救った彼の働きはこの町で語り継がれ、市庁舎には顕彰碑が建てられ、通りには「肥沼通り」という名が付けられたそうです。しかし、第二次大戦後は東西冷戦のため、旧東ドイツ領で行われたこの出来事は世界に知られることもなく、家族ですらその消息は分かりませんでした。その名が知られるようになったのは1989年ベルリンの壁崩壊後、ドイツ側からの要請で日本の新聞に掲載された「尋ね人」がきっかけでした。このことを伝え聞いた弟の肥沼栄治氏が兄・信次の消息を知り、かねてから現地の人に「日本の桜を見せてあげたい」と言っていた故人の遺志を汲んで、100本の桜の木をこの町に寄贈したそうです。この桜は今も「リーツェンの桜」として毎年花を咲かせ、人々の心に生き続けています。

有能な研究者として将来を囑望されていた医師が目の前に苦しむ人々を見て、そこを立ち去ることができず、異郷の地で人知れず散った肥沼信次の姿の中に、医療の原点をみるような気がします。今年、散りゆく桜を見ながら、繰り返し咲いては散る花弁の一つひとつに、かけがえない命があると思えました。



「リフレイン」 詩：覚和歌子、曲：信長貴富
「ドイツ人に敬愛された医師 肥沼信次」
文：笹澤貞次 絵：加古里子 瑞雲舎
2003年 東京

もっと知りたい!
身体 治療
病気の コト

腹腔鏡下手術について

東京女子医科大学 消化器外科 講師 大木 岳志
八王子消化器病院 消化器外科 医師

はじめに

最近の医療は、単に病気を治すというだけでなく、体の負担をできるだけ少なくし、その上で更に効果的な治療を行うという低侵襲性医療を目指す時代となりました。そのような中、当院も先端的な低侵襲性医療として2014年4月より積極的に腹腔鏡下手術を導入しました。今回、当院で取り組んでいる腹腔鏡下手術について概説させていただきます。

1. 腹腔鏡下手術とは

腹腔鏡下手術とは、腹腔鏡という細い棒の様なカメラでお腹の中を見ながら行う手術のことです。これは従来行われている開腹手術と比べて、小さな傷で手術を行うため患者さんにとって術後の傷の痛みが少なく、回復が早いことが特徴です。胆石症に対する腹腔鏡下胆嚢摘出術は、1990年に帝京大学山川達郎教授により日本に導入され、現在では標準的な手術となっています。また、最近では良性疾患だけでなく、胃や大腸などの消化管癌の手術でも行われるようになってきました。

古くは、"Great surgeon, great incision" (偉大な外科医は大きな切開創で手術を行う) という言葉で代表されるように、大きく切開をして広い手術野を確保しながら

ら安全な手術をするというのが外科の基本的な考えでした。しかし、腹腔鏡下手術では、術後の傷が小さいだけではなく、高精度のカメラを使用することで手術野がよく見えるため、より精度の高い手術が可能となります(拡大視効果)。実際の腹腔鏡下手術では、約5~10mmの5カ所程度の小さな切開で手術を行い、最後にお臍の傷を少し広げて、標本を取り出します。いずれも傷は目立ちにくいいため、整容面でも優れています。

2. 保険診療で行われる腹腔鏡下手術と現状

現在、日本で保険診療として行われる主な腹腔鏡下手術は、胆嚢摘出術、早期食道癌手術、早期胃癌手術、大腸癌手術、肝腫瘍(肝部分切除、肝外側区域切除)、脾腫瘍(郭清を伴わない)(脾体尾部切除)、虫垂切除、単径ヘルニア、腹壁癭痕ヘルニアがあります。つまり、多くの消化器や一般外科領域の疾患は同手術の適応となります。2013年の日本内視鏡外科学会のアンケートによると、特に大腸癌に対する腹腔鏡下手術の施行率は57%に達しています。前述の通り多くの疾患が保険診療で認められています。施設ごとに腹腔鏡下手術の技術に差があることや、合併症や病気の状態によって

適応が異なることから開腹手術を選択することもあります。

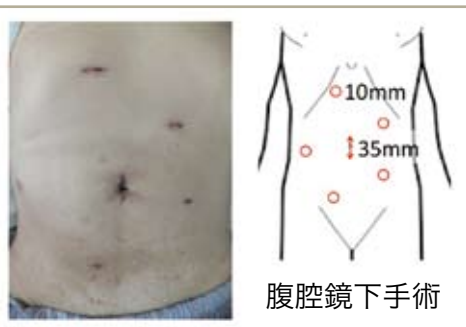
3. 腹腔鏡下手術を安全に行うには

腹腔鏡下手術は、患者さんにとって多くの利点がありますが、外科医師には高度な技術が要求されます。一昨年、千葉県立がんセンターで腹腔鏡下胆管切除胆管空腸吻合術を行った患者さんが術後数日で亡くなった事例が報告されました。また昨年は、群馬大学医学部附属病院で肝臓の腹腔鏡下手術を受けた55例中8人の患者さんが術後4か月以内に亡くなったということがマスコミで話題になりました。いずれも保険適応外の手術であったことや、医師の技術不足が原因とされています。このようなニュースに接すると腹腔鏡下手術が危険な手術だと誤解されたり、また腹腔鏡下手術の方が開腹手術よりも根治性が低いと思われる患者さんもいるかもしれません。

現在、日本内視鏡外科学会では、腹腔鏡下手術を指導する医師であることを証明する技術認定制度というものがあります。一般的な専門医制度では手術数と業績と筆記試験で評価しますが、この制度では実際に行った手術のビデオを審査員が審査し、指導医としての技術が適切かを評価します。消化器外科の中で最も厳しい試験で、消化器・一般外科分野の日本内視鏡外科

技術認定取得者は平均合格率38%、大腸で32%と狭き門です。このような制度の下、同認定取得者の在籍する施設で腹腔鏡下手術を行うことにより安全性と根治性が担保できると思われれます。当院の腹腔鏡下手術は、日本内視鏡外科技術認定取得者の指導の下で定型化した安全な手術で行われています。消化管癌の腹腔鏡下手術を導入してから2年が経過し、技術も向上し安定した成績を残しておりますので、安心して低侵襲性医療を選択していただきたいと思います。

腹腔鏡下手術	2014.4.1 2016.3.31
胆嚢摘出術	185 件
虫垂切除術	43 件
結腸切除術	44 件
直腸手術	9 件
直腸脱手術	1 件
胃切除術	3 件
ヘルニア修復術	19 件
イレウス手術 (小腸切除)	1 件
合計	305 件



「華麗なるシヨパンの調べ」を聴いて

八王子市万町 在住

齊藤 富美子さん



秋も深まった昨年十一月二十七日、八王子消化器病院でロビーコンサート「華麗なるシヨパンの調べ」が催されました。病院のコンサートは通常、奇数月の最終金曜日に行われていますが、私はあるコーラスグループに入会しており毎金曜の夜が練習日となっています。そんなことから病院のコンサートに伺うことは中々出来ませんでした。その時ばかりは「シヨパン」と云うことで練習を休んで聴きに伺いました。私が何故シヨパンが好きかといえますと、学生時代に音楽の授業で日比谷公会堂でのオーケストラの演奏をきく機会があり、そこでクラシックが、とりわけシヨパンが、そしてモーツァルトが好きになりました。その後、結婚し仕事をしながらの子育てで忙しい、音楽をきく間もない日々

を送っていました。子供が幼稚園に通いだした頃、近所からきこえてくるピアノの音に「うちの娘にもピアノを習わせよう」と思いピアノのレッスンを始めることになりました。バイエル、ソナチネ、ハノンとレッスンを進むうちに教則本の他に娘はシヨパン、モーツァルト、ブラームス等もいつの間にか弾くようになり、年に一回の発表会がありました。その時はいつもとは違って結構一生懸命に練習をしていました。普段の練習でも新しい曲をいただいた時は、音を探りながらの頼りない状態でしたが練習を重ねていくうちにあれ!と思う位にスムーズに弾いていました。私は夕食の支度をしている時にきこえてくるピアノの音が好きで、今日は弾き間違いが多いなとか、今日はスムーズに

弾けたとか、きこえてくるピアノの音色を楽しんでいたものでした。娘の弾くピアノをききながら食事作りをする、これも幸せの一つかなと思いつつ、その上達を楽しみにしていました。今回のコンサートでシヨパンの数々の演奏をきき、アツきいたことがある。弾いていたあの曲!と遠い昔が懐かしく思えました。シヨパンの曲をきくと我が子とピアノとの歩み、先生宅への送り迎え、食事作りながらきいた曲等が走馬灯のように頭の中に浮かんできました。人並みですがあの頃は良かった、楽しかったと当時が蘇り、忙(せわ)しくしていた私の気持ちを穏やかに落ちつかせてくれ、胸がキュンとしてきました。娘が家を巣立ってこのかた、長い間弾く人のないピアノ、子育ての楽しみを十分に味あわせてくれたピアノです。毎年時期がくると調律師の方が見え、古いピアノを丁寧に調律して下さいます。今では大切な我が家の宝になっていくピアノですが、調律師の方が「お母さんも弾いて下さい」と云って帰られます。今回のシヨパンをきつけかけにたまには宝物に触れてみようかな、と思うこの頃です。

病院のロビーコンサートは平成十四年十一月を初回に、本年一月の「八王子芸妓衆」新春の舞」で第八十回を迎えました。これは八王子消化器病院が理念として掲げている精神「患者様のための医療」に基づくと私は考えます。また、基本方針には「地域に密着した病院として」地域の皆様の病気の予防と健康保持のため、健診・保健指導およびセミナー等の医療啓発活動を積極的に行います。さらに地域医療機関等との連携を深め、地域医療の一翼を担います。とあります。「地域の人達の健康保持を大切にしよう」と言う一文は明らかにロビーコンサートがその一部を担っていることを表しているものと思います。ロビーコンサートに参加しますと友人・知人によく出会います。また遠方からコンサートにみえる方もいます。そして、当日はコンサートを楽しむ傍らで早くも次回は「よ」と、もう次の催



しを期待する会話が弾んでいます。コンサート開催に当たっての企画、出演者との折衝、プログラム作成(綺麗で私は大好きです)等開催にこぎつけるまでに数々の準備があり、このお骨折りは大変でしょうが、会場は来場された皆さんの喜びで包まれており、この喜びや期待が地域の人の健康保持につながっているものと思います。本文を終るにあたり忙しい仕事の合間を縫ってコンサート開催に向けたご苦労をなさっている病院の方々に感謝申し上げます。

病診連携室・

医療相談室のご紹介

病診連携室・医療相談室 小谷野 真人

病院では、様々な部署で医師・看護師をはじめとした多くの職種が連携して患者様に医療を提供しています。医療法の規定により「医療」とは、「生命の尊重と個人の尊厳の保持を旨とし、医師、歯科医師、薬剤師、看護師その他の医療の担い手と医療を受ける者の信頼関係に基づき、及び医療を受ける者の心身の状況に応じて行われる」と定義されています。

病診連携室・医療相談室は、「その他の医療の担い手」として主治医を中心とした院内スタッフはもとより、行政や地域の関連機関とも連携をとりながら、患者様が治療に専念していただける環境づくりのサポートをしています。以下、当室の担当職員や業務内容等についてご紹介させていただきます。

【担当職員】

当室は、専従の医療相談員2名体制で業務を行っています。医療相談員は、MSW(メディカルソーシャルワーカー)とも呼ばれ、患者様が地域や家庭において自立した生活を送ることができるよう社会福祉の立場から、患者様やご家族が抱える心理的・社会的な問題の解決・調整を支援し、社会復帰の促進を図る専門職者です。当室には、患者様の抱える諸問題に対し多角的かつ専門的見地から支援すべく、国家資格である社会福祉士に加えて介護支援専門員(ケアマネジャー)や介護福

祉士等の介護分野の資格を併せ持つ相談員が在籍しています。

【担当業務】

当室の業務は、(病診連携業務)と(医療相談業務)に大別されますが、それぞれの具体的な業務内容についてご説明させていただきます。

（病診連携業務）

「病診連携」とは、「病院」と「診療所」または「病院」間で連携し、それぞれが持つ機能を活かして患者様に最適かつ効率的な医療を提供する仕組みの事です。当室は、その「病診連携」の強化・推進を図るため当院と地域の医療機関との間の「架け橋」としての役割を担っています。

具体的には、地域の医療機関から専門的検査・治療等のご依頼を受ける際の窓口を務める一方、治療後の経過観察や専門外の疾患の受け入れ先施設との連絡・調整を行っています。また、院内的には入院加療を要する患者様を円滑に受け入れるための病床管理システムや患者様の病状に応じた医療機関・福祉施設をご紹介する際に活用する各種データベースを備え、院内ネットワークを通して職員間での情報共有を図ることで、業務の効率化を実現しています。

（医療相談業務）

当室では、患者様の療養生活に伴う様々な問題や心配事のご相談に応じており、その数は年間600件に及びます。患者様からのご相談内容は多岐に亘り、治療費の支払いについてのご相談、介護保険を利用した在宅療養についてのご相談、リハビリテーションや長期療養を目的とした病院・施設への転院のご相

談等に応じています。また、病氣療養等に伴う就労問題や家族間の問題等を併せて抱えておられる方も少なくないことから、それらの諸問題に対して相談員は、社会資源(社会保障サービスや医療・介護施設等の総称)に関する情報提供や患者様・ご家族との対話を通して問題解決のための相談支援を行っています。

以上が当室の主たる業務になりますが、(病診連携)と(医療相談)の機能を兼ね備えることで、患者様の受入れから退院後の療養生活までの切れ目のないサポート体制を実現しています。

例えば、①地域の医療機関からの専門的治療の依頼に対し、窓口となつて受入れの調整を図ります(病診連携業務)。②治療中は、患者様からのお申し出を受け、療養生活に伴う諸問題に対し相談支援を行います(医療相談業務)。そして、③当院での治療が終了した後は、患者様の病状に応じて、地域の医療機関との連携を図りながら転院や在宅療養環境を整備する(病診連携業務)といった具合になります。

このような多岐に亘る業務に対して我々医療相談員には、幅広い専門的知識と高いコミュニケーション能力が求められますが、患者様が安心して、かつ主体的にご自身の治療法を選択され、充実した療養生活を送っていただくための一助となれるよう今後も研鑽に励んで参ります。



想うこと



3月11日。5年前のあの日から1,827日43,848時間の時が流れましたが、「もう」、「まだ」の受け止め方は人それぞれです。一方、被災された方々に共通した思いは「忘れ去られることが一番辛い」と聞きます。当時は国内のみならず世界の耳目が集まり、様々な支援やボランティアが押し寄せましたが、今ではそれもごく限られたものとなりました。歳月は、

時として心の傷を癒してくれる優しさの反面、大切なもの、忘れてはならないものを忘却の彼方に押しやってしまうという残酷な一面も持ち合せています。

あの日、あの場所で、何が起きたのか、そして今がどうなっているのかを常に心に留めておきたいと思います。 理事 久野久夫